

『野のなななのか』が完成しました

2月16日午後5時の回での舞台あいさつ。左から大林宣彦監督、品川徹さん、常盤貴子さん、清澤茂宏芦別市長、宗方裕之芦別映画製作委員会委員長



大林宣彦監督による芦別映画『野のなななのか』の完成披露上映会が、2月15、16日の2日間にわたって市民会館で開催されました。初日は監督の大林宣彦さん、主演の常盤貴子さん、2日目には同じく主演の品川徹さんも東京から駆けつけ、舞台あいさつを行いました。計4回の上映に延べ約2700人が詰めかけました。

平和を願う古里・芦別の誇りに

大林宣彦監督からのメッセージ
(舞台あいさつより抄録)

芦別を舞台にした映画づくりは、私と芦別の皆さんとの20年越しの約束でした。皆さんが温かく育ててくれた芦別映画学校の20周年にもあたり、その大元を作った鈴木評詞君の夢を、彼が亡くなった後も市民が守り育ててくれました。

この映画では、とても美しい芦別の景色を見ることができます。でも、そう感じさせてくれるのは人の力があつたからこそなんです。ここに生きてきた、賢い人々の記録が土地に刻み込まれています。

またこの映画には、私の知らなかったことがいろいろ出てきます。広島、長崎に原爆が投下され、次は札幌だという噂があつて、だから芦別へ疎開してきたという話。かつては札幌に嫁ぐとき、本州の人に「シベリアに行くのか」と言われた話。ソ連が北海道に侵攻してきていたら、北海道が分割され、芦別の近くで境界線が引かれていたかもしれない話。芦別の炭鉱開発も日本の歴史に翻弄された話。それぞれ映画に盛り込みましたが、未来の平和な社会に向けた手紙としての映画を作りました。

この映画は、これから日本全国、世界へと発信していきます。見た人はきっとこの美しい平和な姿に感動することでしょう。どうか、市民の皆さんは、芦別で映画が作られ、芸術によって平和がつけられることを誇りに思ってください。

2日間4回の上映に 延べ約2,700人が来場

映画のストーリーは、芦別市内で古物商「星降る文化堂」を営む元病院長が92歳で亡くなり、それまで散り散りに暮らしていた妹や孫、ひ孫たちが集まり、家族や古里のことを語り合います。また、謎の女性が現れ、主人公の青春時代、旧樺太での戦時体験を織り交ぜながら、これまであまり多く語られることのなかった北海道の敗戦史もひ

もといていくなど、家族とは古里とは何か、そして二度と戦争を起こしてはならないという平和の尊さを訴えかけます。出演は品川徹さん、常盤貴子さんのほか、安達祐実さん、村田雄浩さん、松重豊さん、左時枝さん、柴山智加さんら多彩な俳優陣。更に市内で募集した6人の小中学生ら市民が好演しています。

北海道内一般公開は5月10日から 3月から全国共通前売券を販売

芦別映画『野のなななのか』は、5月10日(土)から札幌市、旭川市、苫小牧市など北海道内の主な劇場で公開されるほか、5月17日(土)からは東京をはじめ順次全国公開されます。全国共通前売券は3月から販売されます。

○大人(高校生以上)／1,300円 ○小人(中学生以下)／800円

○シニア(60歳以上)／1,000円

●詳しくは映画『野のなななのか』公式サイト(<http://www.nononanananoka.com>)をご覧ください。



上映終了後、大林監督らに感謝の言葉を贈り、握手を求めるなど来場者の長い列が続きました

製作スタッフ支援に参加、おのおか みのる 大丘 稔さん(74歳)
映画にも出演した

昨年6月から7月にかけて、約40日間に及ぶ芦別ロケでは、出演者や製作スタッフの移動、機材の運搬、撮影の合間の食事など、多くの市民ボランティアが製作をサポートしました。このうちの1人で、ロケバスの運転手を務め、映画にも出演した大丘稔さん(74歳)にお話を伺いました。



大丘さんは、「わたしでも何か役に立てればと引き受けましたが、ロケは連日、早朝から時には深夜まで。映画をつくるというのは、こんなにも大変なことなのか、とつくづく感じました」と、苦労を振り返ります。

映画への出演は、予定していた人が出られなくなり、急ぎょ出番が回ってきたもの。院長役の品川徹さんから診察を受けるシーン。煙草がまだ大目に見られていた時代の設定なので、2人とも煙草を吸いながらの演技です。

「急に映画に出ると言われてね、びっくりしたけど、ただ黙っていればいいんだろうと思ったら、『セリフもあるよ』と言われてまたびっくりしちゃって、断ったんだけど、品川さんから指導してもらって何とかやりました。監督さんからは『うまくいったよ』とほめてもらいました」

ご本人が映ったシーンを見た大丘さんは、「いやあ、恥ずかしくて」と照れることしきりですが、「芦別の風景がきれいに映っていて、素晴らしい映画ができて本当に良かったです」と、顔をほころばせました。

<舞台あいさつより抄録>

品川徹さんのコメント

この映画は、製作委員会の皆さん、多くの市民の皆さんの有形無形の支援がありました。食事の世話から撮影現場への移動など、さまざまなかたちで支援くださいました。この映画は芦別でなければ成立しなかった。皆さんに心から感謝します。

常盤貴子さんのコメント

この場に立って感動しています。市民の力で一本の映画ができました。皆さんの熱意が裏

ました。奇跡のような素晴らしい力、一人ひとりの力で出来上がりました。これを機に多くの皆さんが芦別に足を運んでくれることを願っています。

宗方裕之・芦別映画製作委員会委員長の話

昨年の約40日にわたる芦別ロケで、私たちは産みの苦しみを感じました。そして、ついに完成しました。この映画を、これからの芦別の宝として市民の力で育てていきたいと思います。一人でも多くの方に見ていただければ

う、さらなるご協力をお願いいたします。

清沢茂宏・芦別市長の話

芦別映画の完成は、芦別の市民力、連携の強さを証明したかと思えます。芦別は人口1万6000人弱になってしまいましたが、小さなマチの大きな宝をみんなで応援し、財産として記憶に残るものにしてまいりましょう。これを契機に芦別をさらに元気なマチにしていきましょう。

指揮者先頭

指揮者先頭とは、「指揮者は常に皆の先頭に立って行動する必要がある」という意味で、私が考えた大切にしてほしい言葉です。

No. 21

気温も少し上昇し、春の訪れが待ち遠しい季節になりました。市民の皆様におかれましては、厳しい冬を乗り越えて、春の活動的な毎日を楽しみにしていることと思います。

選手が大活躍し、大きな感動を与えてくれました。スポーツでも政治でも、ひとつのことを成し遂げる信念と努力の大切さを改めて実感した次第です。



さて2月に行われたソチ冬季オリンピックでは日本

3月は新年度の予算を審議する大切な市議会が行われます。福祉、子育て、スポーツ・文化振興等々、多岐にわたる予算は芦別の未来を決める重要不可欠なものです。強く豊かな芦別を実現するため決意も新たに市政を進めて行きたいと思えます。是非、議会傍聴にも足をお運びいただければ幸いです。

(平成26年2月20日・記)

芦別市長 清澤 茂宏

今回の芦別上映会よりひと足早く東京都内で行われた『野のななのか』マスコミ向け試写会では、私も出席し市職員と共に芦別をPRしました。11月31日